



Title	＜書評＞出原栄一著「日本のデザイン運動：インダストリアルデザインの系譜」ペリカン社, 1989年, 304頁
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 1990, 29, p. 114-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52669
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書 評

出原 栄一 著

「日本のデザイン運動 — インダストリアルデザインの系譜 —」

ぺりかん社, 1989 年, 304 頁

本書は待望久しいものであった。著者自身「…わが国におけるデザイン運動を真正面から取り上げた著作が以外に少ないのは残念なことである」と、‘あとがき’で述べているように、日本におけるデザイン動向を歴史的に通観しうる著作はこれまでほとんどなかった。英国や西ドイツでは、自国のデザイン史と呼べる著作がかなり公刊されてきたが、日本でも本書によってようやく第一歩が踏み出されたと言えよう。

他の歴史と同様、デザイン史も単にデザインに関係した出来事を年代史的に記述していけばよいというものではない。何を重要で意義ある出来事とするかにすでに評価選択が働く。従ってそこに一定の視点が必要となる。特定の視点を採用することは、一方でその視点の下に捉えられるものは明るみに出すが、捉えられないものは隠すという作用を避けられない。だがむしろ特定の視点が貫かれることによって、他の視点の可能性が示唆されうるのである。

本書も明確な視点を中心に捉えられている。それは序章において提示された2つの問いに含意されている。一つは‘デザイン運動は終了したか’、もう一つは‘日本の運動は世界の文化に貢献したか’という2つの問いである。特に前者の問いにおける‘デザイン運動’という概念の内に著者の視点がある。ここで言われているデザイン運動とは、モリス以来の近代デザイン運動を指しており、「この問いに答えるためには、その前にまず、近代デザイン運動というものの理念を問い直し、この理念に照らして運動の理論的支柱となっていた「機能主義」の本質と、1960年代以降に現われた装飾化の傾向との関わりを、その根底から分析してみる必要があるだろう」(10頁から11頁)と述べられているように、機能主義的なデザインの動向を運動の中核として捉え、言わば日本におけるこの運動への同化の過程を見るという視点が全体を貫いている。また「この運動はまぎれもなく産業革命以降の近代工業技術の発展およびそれがもたらした弊害というものが契機となって発生したものであるから…」(15頁)というように、生活造形の機械化、工業化と歴史的に深くかかわるインダストリアルデザインの動向が中心ジャンルとされている。

以上のような視点から、明治初期から今日まで約120年間の歩みが、4つの時期に区分され通観される。第1期は、明治初期から第1次世界大戦までで、産業運動の時代と特徴づけ

られる。美術と工芸の分化、洋式技術の導入による工業の成立と手工芸との分化、図案概念の成立と状況、工芸学校の設定等々、具体的な事実即して記述されていく。しかしこの時期は、近代デザインの理念の自覚以前の段階と捉えられている。というのも結局のところ動向全体が貿易と産業振興によって動機づけられていたからである。

第2期は、第1次世界大戦から第2次世界大戦までの間で、芸術運動の時代と呼ばれる。この時期は、西欧の近代デザイン動向が、思想的にも実際的にも日本に紹介され、それに影響され理論争やそれに対応した運動の生まれた時期で、伝統的な手工芸品を機械的に量産化しようと試みたり、ブルーノ・タウトの影響で「規範原型」作りを試みたり、「見る工芸から使う工芸」という理念の自覚に努めた国立工芸指導所の動向、また帝展に工芸部が設置された出来事に象徴されるような工芸の鑑賞性重視の美術化に批判的な新工芸運動や民芸運動、バウハウス教育の導入の動き、さらに第2次世界大戦下での代用品奨励運動の中での機能主義的デザインの試みなどが注目されている。ただ日本では当時産業基盤が整っておらず、「その運動が具体的なデザイン活動として産業や市民生活に大きな変革をもたらすまでに至らなかった」(23頁)故に、思想の導入と実験的試みの段階と捉えられている。

第3期は、第2次世界大戦後から1950年代末までの時期で機能主義の時代とされる。ここでは、インダストリアル・デザイナーの誕生と活動状況、機能主義デザインの降盛、機能概念の変貌とその展開、グッドデザイン運動、そしてクラフトデザインの動きなどに、国際的なデザイン運動に遅れはしたが、日本での機能主義デザインの開花が見い出されている。

第4期は、1960年代から今日までで、商業主義デザインの時代と呼ばれている。生産品の多品種化、宣伝競争の激化、モデルチェンジによる流行の加速化、スタイリングデザインの氾濫、デザインプロセスの合理化など、企業主導型の商業主義デザインの隆盛の時代である。消費者の側でも、生活水準の向上ともあいまって、遊びや感性重視の傾向を示す。1970年代初めの石油危機の時期に、反作用的な動向が一時的に見られたが、基本的には機能主義的なデザインの衰退期と理解されている。

さて、著者は、第4期すなわち今日の状況における機能主義的デザインの衰退という事態にあたって、「デザイン運動は終わったか」という問いを提起していると思われる。そしてこの問いに対する答えとして、「このような庶民文化というものの建設をめざすデザイン運動のこれからの担い手は、デザイナーや企業家を中心になるよりも、むしろ生活者自身が中心的な役割を果たさなければならないだろう」(275頁)というように、運動としての目的をある程度達成したとみなしている。それに対して本来近代デザイン運動が根底において目指していた民衆による民衆の生活文化の建設という面では、今日復古的デザインといった反動的傾向の出現に見られるように、この目標が達成されているとは言えず、その意味で著者は、今後のデザイン運動の展開として生活者主導によるデザイン運動の可能性を見出し

ている。

私はこの見方に大卒のところで賛同する。しかしそのように理解される時、新たな視点が提起されるように思われる。生活者としての民衆がデザイン運動を中心的に担うためには、デザイン運動における生活者自身の役割が何であるかが理解され、自覚されねばならない。このことは同時に、デザイン運動史を生活者の立場から見直す必要性を示唆している。すなわちこれまで生活者たる民衆は、デザインをどのように受容し、どのように生活ないし文化を形成してきたのかを振り返って見る必要がある。言わば生活者によるデザイン受容史の必要性である。

この側面に目を向ける時、多少著者に同意できない点がある。それは、著者が庶民文化の建設と言う時に、機能主義デザイン×簡素美×庶民の生活美学という図式で考えていると思われる点である。これは非常に単純化した図式化で、逆に著者からの反論を招くと思うが、あえて話を続ければ、そこには庶民階級／貴族階級（今日どのように姿を変えていようと、なお存続している階級差別構造）という対立構造が暗黙に前提されていて、その下での庶民のあるべき生活像やそれに対応するデザイン像が想定されている。しかし近代以降の民衆あるいは大衆の生活動向をながめてみれば、そこに生活水準の向上とともに上流志向あるいは上に向けての階級移動という傾向が見い出されるのである。今日デザインが差異のための差異を生み出し、差異表示作用として機能していると、時に事実認定的に時に批判的に指摘されるが、このデザインの差異表示機能は、まさに民衆ないし大衆の生活意識に潜在する上流志向を一つの基盤にしているのである。このことが自覚的に考慮されないかぎり、庶民文化の建設と言っても、社会的経済的要因で庶民階級にとどまらざるを得ない大衆を除けば、民衆はあえて庶民階級にとどまろうとはしないし、その結果積極的に文化を創出しようとはしないであろう。それ故庶民階級／貴族階級という対立構造を前提しない生活者の生活美学を発想しない限りは、次なるデザイン運動は展開しないであろう。

ともあれ、このように別の視点を構想しうるのも、本書によって日本のデザイン運動の骨組が概観しうるからである。また今後とも、本書の立つ視点の下でも、さらに詳細な部分史的研究が積重ねられようし、あるいは別の視点や他のジャンルを中心に捉えたデザイン史が書かれると思われるし、それをおおいに期待している。しかし忘れてならないことは、今後の研究の積重ねや別の研究にしる、それらを可能にする基盤的枠組が本書によって明確に整備されたという事実である。この点で私も著者に感謝の意を表わす一人である。

（渡辺 眞 京都市立芸術大学）